

呼吸器内科

診 療

当科には常勤医師4名、非常勤医師1名が所属し、主に胸部悪性腫瘍（肺がんや悪性胸膜中皮腫）の診断と内科的治療（化学療法）を行っている。この他にも肺結核、肺炎、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患、慢性呼吸不全など診療も行っている。

肺がんや悪性胸膜中皮腫患者さんのほとんどは最初に呼吸器内科を受診するために、速やかにがんの診断と病期分類を行い、胸部外科や放射線科とも連携し、個々の患者に最も適した治療を提供できるように努めている。進行した肺がんや悪性胸膜中皮腫では化学療法を中心とした治療を行うが、常に診療ガイドラインや最新の臨床研究に基づいた治療法を患者さんに提供するようにしている。治療前に患者さんに病気の状態や治療により得られる効果や副作用を十分に説明し、患者さんの希望に沿った治療法を選択するようにしている。平成22年度の肺がん入院患者数は822人で、前年度より増加している。最近の研究成果により、個々の患者さんのがんの組織型や遺伝子変異の有無に合わせて抗がん剤を選択する個別化治療が可能となってきた。例えば肺腺がんの約40～50%で上皮成長因子受容体遺伝子変異を認め、この場合ゲフィチニブが奏効し無増悪生存期間も従来の化学療法よりも延長することが明らかにされた。当院でも初回治療より積極的にゲフィチニブによる治療を行っている。また最近抗がん剤をがんが増大しない間続けて投与する維持療法の有用性も明らかにされ、さらに新しい抗がん剤の開発もされて、患者さん一人当たりの化学療法の実施回数も増加している。

肺がんではがん細胞の組織型や遺伝子変異の有無で治療法が選択できるようになったために、治療前にこれらの検査に必要な量のがん細胞を採取することが重要となる。気管支鏡検査はがん組織より直接検体を採取できるために、肺がんの診断や治療法の選択のために有益な検査である。さらに気管

支超音波内視鏡を用いることにより縦隔リンパ腺からの検体採取も可能になった。また気管支鏡検査は肺感染症、良性肺疾患の診断にも有用な検査である。平成22年度の気管支鏡検査数は115件と前年と比べてやや増加した。気管支超音波内視鏡検査の実施例数も増加している。今後も気管支超音波内視鏡や極細気管支鏡を用いた気管支鏡検査を積極的に行っていきたい。

当科はすぐれた肺がん治療法を開発するために積極的に多施設共同の臨床試験に取り組んでいる。現在、厚生労働省肺がん研究班(JCOG)、西日本がん研究機構(WJOG)、中日本呼吸器臨床研究機構(CJLSG)などの臨床研究グループに積極的に参加して、肺がんや悪性胸膜中皮腫の標準的治療法の確立を目指して、全国のがん治療施設と協力している。

また当院は結核病床を有する病院のため、他の医療機関から結核患者が紹介されてくる。平成22年度の結核患者入院数は102人で前年度よりやや増加した。80歳以上の高齢者や外国人の入院患者の割合が増加しているのが最近の特徴である。耐性菌出現を予防するために、患者さんに確実に抗結核薬を服薬してもらうことが重要である。当院では看護部や保健所と協力してDOTS(服薬を直接確認すること)を実施している。

抱 負

三河地区にあるがん専門病院の呼吸器内科として、常にエビデンスに基づいた最新の肺がんや悪性胸膜中皮腫の診断と治療を提供し、「肺がんの診療なら愛知病院」と言われるようにしていきたい。



